

能登半島地震から感じた 平時からの居場所の必要性



朝市通り周辺

8月末に輪島と七尾へ視察に向かいました。そのうちの一つ、「わじまティーンラボ」は、小学校高学年から中高生向け、ティーンたちの居場所でした。ミチクサー新しい時間の過ごし方をコンセプトに、震災前の2022年から開かれています。震災後は、子どもの利用が3割ほど増えたそうです。

カフェスペースや子どもたちと作った展示棚がある図書室、自習室や畳スペース、音楽スタジオ、どの部屋も子ども目線で作られていて、子どもたちは好きな空間を選んで過ごせます。

みんなが集う大きなカフェスペースには、天井に可愛らしい小さな提灯たち、おしゃれな吊るし照明、木材がランダム



カフェスペース

に積まれたオブジェ？遊び心満載です。スタッフのこの空間での様々な小さな仕掛けが、ここに関わる大人の想いであって、きっと子ども達

被災地での遊びボランティア

被災地では色々な我慢が強いられます。子どもたちのあそび場にも仮設住宅が建ち、思いっきり遊ぶこともできません。みんなで遊んで楽しい、血が回らなくて悔しい、回ってうれしい。遊びを通して様々な感情表現ができたり、エネルギーを蓄えたり、発散したり。一緒に遊ぶことで見えてくるものもあります。大変な状況の中では、遊びは後回しにされてしまいますが、そんな時こそ、遊びは必要なのではないでしょうか？



に積まれたオブジェ？遊び心満載です。スタッフのこの空間での様々な小さな仕掛けが、ここに関わる大人の想いであって、きっと子ども達

富山イタズラ村子ども遊ばせ隊
山下 敦子



に色々なことを語りかけています。

それに応じて、子ども達も様々なことを仕掛けてきます。手作りのカレンダーには、いろんな予定が書かれています。子どもたちから出る「やりたい」に大人がそっと力を貸します。たくさんの楽しい企画は名前を見るだけでもワクワクです。一緒に行った小6の娘は、この空間がとっても気に入ったようでした。おしゃれで、可愛らしく、窓からは光が差し込む素敵な空間。いじめなどで傷つき、いつもは広い空間や人が苦手な娘は、テーブルに座り絵を描き始めました。ほっと安心できる空間だったのでしょうか。その場にいる人が大事!!とスタッフの方が言われましたが、その場にいる人と、その人たちが作り出す空間両方が、子どもたちの心を解きほぐし、活力へとつながっているのだろうと感じました。



手作りカレンダー

日常から、家庭、学校、職場以外の様々なコミュニティ、居場所を一人ひとり持っておくことで、何かあったときに助けとなってくれるはず。そしてそこから支援にも結び付くのではないのでしょうか？

ごちゃまるクリニックへの募金

ありがとうございました

集まった123,000円を全額ご寄付させていただきました。11月末にも大きな地震がありました。それでも、能登の人々は頑張っています。まだまだたくさんの支援が必要です。どうか、これからも能登を忘れず、話題に挙げてみるなど、応援頂けたらと思います。



Japan Association for Infant Mental Health

日本乳幼児精神保健学会

NEWS LETTER

発行者 日本乳幼児精神保健学会 理事長 渡邊久子

9号

2025年1月15日

2024年度 一般社団法人 日本乳幼児精神保健学会 第4回 学術集会を終えて

大会長 犬飼 和久
いぬかい 和久



2006年第10回FOUR WINDS大会から18年ぶりの浜松大会では、メインテーマを「妊娠、出産から始まる親子への寄り添い」、サブテーマを「子どもがかわいいと思える支援/出会った時を大切に」とし、乳幼児期より遡って周産期にも視点を

当てたプログラムを企画しました。

堀内勤先生には「心の曙」と題して、橋本武夫先生には「Loving Hug～医学に於ける実践と挑戦」と題して特別講演をしていただき、参加者に大きな感銘を与えてくださいました。教育講演のひとつでは山下浩先生に「子どもたちと養育者の小児期逆境体験ACEsを理解する」と題して、周産期からの逆境体験とその後の成長発達への影響について、また2つのシンポジウム「妊娠、出産から始まる親子への寄り添い」「こころの響き

合い(間主観性)での親子支援」を開催、多職種からの発表をいただきました。御講演いただいた全ての方々のおかげで子育て、親育てのスタートは「周産期にあり」を、参加者の皆様に訴える事ができました。次回大阪(11月2-3日)での第5回大会では更に周産期に於ける親子の関わり、絆についての学びを深める事が期待されます。

今回初めての試みとして事例検討会、ロバートソンフィルム上映会、ポスター発表を同時進行させました。全ての講演はオンデマンド配信されていますのでご視聴ください。

最後になりましたが学会が盛会に終える事が出来たのは9回にわたる毎月の実行委員会に出席いただいた実行委員、当日会場ボランティア、講演者、参加者のご協力の賜であり、大会長として心より御礼申し上げます。

第5回学術集会 in 大阪

◆ 大会テーマ

妊娠、出産から始まる親子へのよりそい

～親子の出会いからはじまる
甘えに満ちた子育てを目指して～

日時 2025年11月2日(日)、3日(月)

会場 千里ライフサイエンスセンター

大会長 北島 博之

子どもの心の育ちはヒトの生き方を決定する最も大切な事です。わが国の長い歴史の中で近年まで認識されていなかった乳幼児虐待・家庭内暴力・中高生や産後うつ病の母親の自殺の増加を認めています。

ヒトの心の始まりが妊娠中からの親子関係にあり、生後早期からの赤ちゃんとの健康的な相互作用でヒトへの信頼・健やかな心が育まれてゆきます。大阪大会では子どもの心に親子のどのような生き方が影響を与えているのか振り返ってみます。

日本乳幼児精神保健学会 事務局

● 2024.9月に事務局が移転しました。
〒231-0063 神奈川県横浜市中区花咲町1-4 ヘルメゾン桜木412 (ゆりかご訪問看護ステーション内)
一般社団法人 日本乳幼児精神保健学会事務局
TEL 045-341-0025 FAX 045-341-0365 E-mail jimukyoku@jaimh.org

世界乳幼児精神保健学会 日本支部



会費のお振込みは下記の口座にお願いします

みずほ銀行(金融機関コード:0001) 新横浜支店(店番号:356)
普通預金 3055110 一般社団法人日本乳幼児精神保健学会

お詫びと訂正: 以下、脱字と誤字がありましたこととお詫びして訂正いたします。
ニュースレター8号/4p/誤「認定NPO法人 いわき放射線市民測定たらちね」→正「認定NPO法人 いわき放射線市民測定室たらちね」
学会誌17号/もくじ/誤「渡邊久子」→正「渡邊久子」

「誕生 ～小児科医として3000のお産に立ち会って～」

くわはらこどもクリニック 桑原 勲



小児科医としてお産に立ち会う、わたしはそのような幸せな機会に長年恵まれてきました。

本来お産は、生活の中で行われてきた生理的な営みです。命の誕生の場であり、家族の誕生の場でもあります。わたしは、10年間の産科医との協同開業

時に数多くのお産に立ち会うなかで助産師の役割の大切さを実感したことから、12年前に新たに助産所を併設した小児科クリニックを開設し、数は少ないものの今もお産に立ち会っています。助産所では、妊娠中から一貫して一人の助産師が母親とかかわることが最大の特徴です。妊娠中に結ばれた助産師と母親との絆が、母親の持つ産む力を最大限に引き出し、生理学的プロセスによるお産を可能にしています。母親には産む力があり、赤ちゃんには生まれてくる力があ

るということを信じ、その力を最大限に引き出すのが助産師の役割であり、助産所でのお産は、そのようなお産です。

過去には、お産で多くの母親と赤ちゃんの命が失われてきたことから、お産は医療の対象となり、それらの問題の多くは解決されてきました。助産所では、基本的にローリスクのお産のみを扱っていますが、医療のバックアップがあってはじめて成り立つものです。一方で、医療に依存するお産には、母親の産む力、赤ちゃんの生まれる力を感じにくくしている側面があり、それが子育てにも悪影響を及ぼしていると、小児科医の視点からは感じています。

伝統的な助産所でのお産を次世代へと受け継ぐと同時に、そのエッセンス産科医療に携わる人たちに伝え実践してもらおうことが、これからの目標です。子供たちの未来は明るいと感じています。

「妊娠期からつながる支援で親子の育ちを支える」

一般社団法人ここみ 代表理事/NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 理事 大村美智代



『子育てには「学び」と「情報」と「つながり」が必要!』

『困ってからつながるのではなく、日常からつながっておく予防的支援が大切!』

この2つを実施できるのが地域子育て支援拠点事業です。地域子育て支援拠点事業

は子育て支援センターや子育てひろばなどと呼ばれ、全国に約8,000か所あります。子育て中の親子が気軽に集い、相互交流や子育ての不安や悩みを相談できる場として設置されています。

浜松市では子育て支援ひろば全25か所で月2回、助産師による「妊婦と家族のための講座」が開催されています。講座を土日開催しているひろばもあり、夫婦での来場も多いです。

また、伴走型相談支援の妊娠8か月時面談はすべての妊婦が対象で訪問時にはひろばで開催される「妊婦と家族のための講座」が紹介されています。

このように親子に身近な子育て支援ひろばが母子保健と連携し、妊娠期から子育て家庭を共に地域で支えることが予防的支援として重要だと考えます。

ここみでは孤立育児を防ぐためにここみドゥーラ事業(子育て世帯訪問支援事業を受託)やひろばでの沐浴教室・プレパパ教室・パパのおしゃべり会・多胎おしゃべり会・小さく産まれた子の交流会・療育に通う親子のおしゃべり会なども実施しています。

「ここでみんなで育ちあい、学びあい、支えあい」を合言葉にこれからも「妊娠期からつながる支援で親子の育ちを支える活動」を行い、子育てが楽しいと思えるまちづくりに貢献できたらと思います。

子どもと養育者の小児逆境体験ACEsを理解する

医療法人慶仁会 天神病院 山下 浩



第4回学術集会で教育講演「子どもと養育者の小児期逆境体験(ACEs: Adverse Childhood Experiences)を理解する」という話をさせていただきました。

1990年代後半に米国で行われたACE studyは、小児期の児童虐待や家庭機能不全の体験が、成人の死亡原因につながる危険因子(抑うつ、自殺企図、薬物依存、多数との性交渉、肥満、心疾患、がん、脳卒中、低収入、暴力被害など)に深く関連していることを明らかにしました。児童精神科での診療で診ている患者さんだけでなく、世の中で起こっていることの多くもACEsと関連していると考えています。そこで必要なものは、「トラウマインフォームドケア(TIC)」と「集団欲」の視点であると感じています。

乳幼児期のアタッチメント形成をうまく提供できない親御さんの問題も、学校などで「いじめ」をしてしまう子どもの問題もそういう視点が必要のように思います。

ヒトは誰でも「集団欲」とその中で認めてもらいたいという「承認欲求」を持っています。ACEsを体験した人は傷つきトラウマとなり、それが癒やされずに今に至っている人たちであり、それらの欲求が満たされていない人たちです。そして孤独を感じ、「それに耐えられない」と引きこもってしまうか、あるいは他人にやりきれなさをぶつけたり攻撃したりいじめたりすることで憂さを晴らしてしまうように思えます。

しかし本当は、皆と一緒に居たい、そしてその中で認められたい、という思いがある。そう理解することでそういう方々のこちらに対する見方も変わってきます。そしてTICの視点を持ちながら接することで、それがその人たちの癒しになりレジリエンスを高めることにつながると日々考えながら診療に当たっています。

保育園におけるあまえ対応の実践

元高知市立保育園園長 山下 由美



園長になり赴任した園で乳幼児精神保健の勉強会を全職員と受けました。あまえ療法の理論を学び事例検討を重ねていた頃、気になる姿があり個別に関わっていた4歳児の母から夫の浮気について相談を受けました。母は

毎日来園し、一方的に夫や姑の話、自分の生い立ち等を繰り返し何時間も話していききました。私は母を受容し話を聞く事で、気持ちが落ち着き安心して心の整理が出来ればと思っていました。母は厳しい育ち(母子家庭・姉重度障害・実母アルコール依存症)をしており、物心がつく頃から家事と姉の世話を担っていました。ずっと自分の感情を抑え込み生きてきて、結婚後夫に罵声を浴びせ聞いてもらう事で、母は愛されていると実感してきました。私は生育歴を聞く

ち、母に対し相談してくれた事に感謝し敬う気持ちが湧いてきました。本児は家庭の混乱により攻撃的な言動を繰り返していましたが、園でスキンシップの関わりを大切に丸ごと受け止めていき落ち着いていきました。母は受け入れられる経験を重ね心地よさを実感する事で、夫を受け入れる力が付き、離婚を回避して仕事を始め表情も明るくなって行きました。母の生きる力の強さを感じました。

親子支援に取り組む中で、自分の育ちや価値観、考え方に捉われ保護者を受容できない自分達に気付く時があります。一人だけでの継続は難しいですが、共に学び温かく支えてくれる仲間がいると自分を見つめ直し実践していけます。

園でのあまえ対応の実践は、子どもも保護者も職員も丸ごと受け止められ、温かく寄り添ってもらうことで、安心して人を信頼する一歩を踏み出すことが出来ると実感しています。